優秀賞

# ぼくの気持ちのつたえ方

小豆島町立池田小学校三年　船波　大雅

ガッシャーーン！

お母さんの足元に、ぼくがなげた水とうからお茶がばっとこぼれて、ころがっていった。

（ぜーんぶ、お母さんが悪いんだ。ぼくの気持ちなんてぜんぜんわかってない。）

お母さんは、ぼくの水とうを拾うと、だまって台所へお茶を入れに行った。

そんなイライラした気持ちもわすれたある日、家族で図書館に行った。

「なつかしい！」

というお母さんの声が聞こえた。お母さんは、「おぼえていろよ　おおきな木」という絵本を持っていた。お母さんが小学生の時に、読書感想文を書いたらしい。ぼくは、読んでみることにした。主人公は、大きな木のかげの小さな家にすんでいるおじさん。おじさんは、とにかくその大きな木が気に入らないみたい。何かあれば、大きな木のせいにして、木をけったり、「おぼえていろよ。」と言ったり…。おじさんは気づいてないみたいだけど、大きな木のいいところをぼくは見つけたよ。大きな木かげでゆっくり休めるところ、家の場所の目印になるところ、秋においしい実がたくさんなるところ、葉っぱが落ちるとたき火でやきいもができるところ。ぼくならじまんしそうだなあ？

だけど、おじさんはついにオノで木を切りたおしてしまう。切った後、大きな声で泣いてしまう。きっと、木のよかったところに気づいたんだろうなあ。でも、イライラした気持ちのまんま切ってしまったんだろうなあ。おじさんの気持ち、分かるなあ…。

あれ？ぼくもこんな気持ちの時があるぞ。たとえば、この前のお母さんとのけんか。たしかに、お母さんの一言にイライラしていた。いつも、お母さんとけんかした後は、後かいするんだ。お母さんのせいにしているけれどぼくも悪かったなあって。ぼくは、今からでもあやまろうと思えば、あやまることができる。けれども、おじさんは木を切ってしまったんだから、どうしようもない。あやまることもできないし、なおすこともできない。おじさんは、切りかぶで泣いているだけだった。ぼくがおじさんなら、のこっている切りかぶを大切にすると思う。これいじょう、きずがつかないように気をつけると思う。そして、ぼくが気づいたおおきな木のいいところを、木に話したいなあと思う。ありがとうって。だけど、

この本にはつづきがあった。おじさんは、切りかぶから小さな新しい芽が出ていることに気が付くと、一生けん命お世話をする。ああ、おじさんは、お世話を一生けん命することで、木にごめんなさいの気持ちをつたえていたのかもしれないな。大切に育ててまた大きくなったら、今度はなかよくくらせそうだと、おじさんのにこにこした顔を見てほっとした。

だけど、イライラして行動すると、取りかえしのつかないこともある。物がこわれたり相手にけがをさせてしまったりすることもあるかもしれない。そうなると、さらに自分も相手もいやな気持ちになってしまう。イライラした気持ちで水とうをなげた後、こぼれたお茶のあとを見て、ぼくはもやもやしていた。お母さんも同じ気持ちだったのかもしれない。お母さんは、ぼくの気持ちを分かっていないわけじゃないのは分かっているんだ。周りの人をぼくのせいでもやもやさせたくないのに。

じゃあ、今ぼくにできることって何だろう。お母さんにあの時のことをあやまること。だけど、後になってあやまるのってゆう気がいる。だってけんかのことを話に出すと、またお母さんをおこらせてしまうかもしれないし…。おじさんが木にお世話をする事で気持ちをつたえたように、ぼくなりのつたえ方で気持ちをつたえられないかな。大きな木のいいところをたくさん見つけられたぼくなら、お母さんのいいところもたくさん見つけられるかもしれない。家事をしてくれたり、お仕事に一生けん命だったり、べん強をおしえてくれたり…。でも一番は、一しょに遊んでくれるところかな。家ぞくみんなでもも太郎電鉄のゲームをする時なんて、さい高に楽しいんだ！お母さんは、いつもぼくたち家ぞくが楽しくなるようなことを考えてくれているんだな。おじさんみたいに、イライラした時ほど、いいところって分からなくなっちゃう。ぼくが気づいていないいいところ、もっともっとさがして、いっぱいお母さんにつたえたいな。これならぼくにもつたえられそう！お母さんにだけじゃなくて、周りの人みんなのいいところも見つけてみたいな。さて、どんな風に、お母さんにつたえてみようかなぁ。